国士舘を支えた人々

長瀬鳳輔

浪江　健雄

長瀬鳳輔高等部学長（大正８年～15年）

国士舘は創立以来、政界、財界、教育界、新聞・言論界など多方面の人々によって支えられてきた。そうした恩人の一人に、国士舘高等部（大正八年一一月開設）の初代学長を務めた長瀬鳳輔（ほうすけ）があげられる。

長瀬は、一八六五（慶応元）年、現在の岡山市栄町で開業医を営む長瀬時衡（ときひら）の次男として生まれた。時衡が軍医となったので、その転勤にともない各地へ転住、幼少時代に大阪の漢学者高見照陽に漢学の教えを受けた。一八八〇（明治一三）年、東京外国語学校へ入学し、中国語を修学。次いで、一八八三（明治一六）年、東京帝国大学予備門に入り、この間にアメリカ及びドイツへの留学を果たした。まずは、一八八五（明治一八）年に、かつて新渡戸稲造・佐藤昌介（北海道帝国大学初代総長）・元良勇次郎（日本最初の心理学者）らも学んだジョンス・ホプキンス大学へ留学し、歴史及び経済学を修学。ついで、一八八八（明治二一）年、ドイツへ留学し、一八九四（明治二七）年、ハルレ大学において、ドクトル・オブ・フィロソフィー（哲学博士）の称号を取得する。同年に帰国すると、直ちに山口高等学校教授となり、

一八九六（明治二九）年、陸軍大学教授、一八九九（明治三二）年、陸軍参謀本部嘱託、一九〇二（明治三五）年、台湾総督府外事課事務嘱託を拝命し、アモイ東部地域調査に派遣される。一九〇六（明治三九）年、再び参謀本部付きとなり、一九〇九（明治四二）年には参謀本部陸軍編修を拝命している。

一九一七（大正六）年、国士舘開塾時に阿部秀助（慶應義塾大学教授）の斡旋で講師を務め、一九一九（大正八）年の世田谷移転・財団法人化に際して、理事に就任、さらに国士舘高等部学長を務めた。一九二三（大正一二）年、中等部校長となり、同年参謀本部陸軍編修を辞し、国士舘内に引っ越して教育に専念した。一九二五（大正一四）年、中学校創立の際、校長に就任。一九二六（大正一五）年、胃腸疾患により帝国大学付属青山外科病院に入院するも、同年七月七日逝去し、翌日国士舘葬が営まれ、学内墓地へ葬られた。享年六一歳。当日の会葬者、弔電及び弔辞を寄せた人々は千余名を数えたという（『国士舘々報』第二巻第五号）。

長瀬の人となりについて、親交のあったジャーナリスト満川亀太郎は、その著書『三国干渉以後』（平凡社、一九三五年）において「氏は参謀本部編修であったが、昼間は殆どその全部を新聞記者との応接に費やし、自宅に帰ってからは深更まで数種の雑誌に執筆さるゝのが常であつた。客を愛し、殊に青年志士を指導して倦（う）むところを知らず、ドイツのベルリン・バグダッド政策や、ロシア革命に対する観察は全く堂に入つたものであつた」と述べている。

長瀬は、欧米への留学を契機に、西欧近世史、とくにフランス革命後の外交史を研究し、外交史の権威として知られていた。また、陸軍参謀本部在職中には、当時の国際情勢を分析するのに不可欠な、中央アジア・バルカン半島の研究を深めたことから、国際事情に通じた知識人として重んじられた。

長瀬が活躍していた時代は、第一次大戦後の世界再編のただ中にあり、欧米列強と肩を並べ、アジアの盟主たらんとしていた日本の行く先については、多くの論客たちによって盛んに論じられていた。長瀬もその内にあり、数多くの論考を発表している。

主要著書には『巴爾幹（バルカン）の変遷』（富山房、一九一四年）、『土耳古（トルコ）及土耳古人』（富山房、一九一五年）、『現代バルカン』（東京宝文館、一九一六年）、『擾乱の露西亜（ロシア）』（鍾美堂書店、一九一七年）、『欧州大乱の真相』（竜川社、一九一八年）、『ケーザル時代羅馬（ローマ）史論』（興亡史論刊行会、一九一八年）、『ナポレオン・ボナパルト』（実

業之日本社、一九一八年）、『土耳古廃頽史』（外交時報社出版部、一九二〇年）、『巴爾幹の将来』（外交時報出版部、一九二〇年）、『戦後の列強』（民有社、一九二一年）、『土耳古の新形成に対する史的観察』（日本教育者協会、一九二三年）、『世界各国興亡表』（世界国政調査会、一九二六年）などがある。また、雑誌・新聞等へ寄稿したものを取り上げれば枚挙に暇がない。

長瀬の時論で特筆すべきは、欧米留学の経験に加え、中国・台湾での職務経験もあることから、東アジア情勢を肌で感じ取っての立論であり、欧米とアジアの双方を冷静に分析できる優れたバランス感覚を持っていたことにある。その一端が垣間見られる論考を紹介しよう。

「世界主義よりも日本主義」（『亜細亜時論』第五巻第五号）と題する論考では、昨今の「世界主義」は、アジア諸民族が自己を忘れ、欧米に追随する姿勢にあるとし、日本も例外ではないとしている。そして、その原因の一つが当時の教育にあると論じている。すなわち「現在の日本人は、小学校を卒業して中学校に入学すると、逸早く欧米崇拝の教育を受け、高等学校、大学校と進むにつれて愈々益々其度を高むる結果、遂には日本自国を軽んじ、日本人自身を卑んで怪まざるに至る者が多い」としている。要するに、当時の日本が欧米に負けまいとしすぎるあまり、日本古来の良き伝統や精神を忘れかけていることに警鐘を鳴らしていたのである。また、一九一九（大正八）年一一月二一日、大民本部での講演では「科学は西洋人より教ったのは万人の衆しく認むる処である、然し乍ら、唯一の誇りたるべき道徳人道迄も、彼等の恩恵に依りたるが如く吹聴する学者あるに至っては真に驚かざるを得ない、此に至っては西洋謳歌主義も又極まれりと云ふべしであらう」（「光輝ある東洋文化」『大民』第四巻第一号）と述べ、精神文化まで西洋を手本とすべきではないとしている。

この精神は、国士舘高等部開館式での演説（『大民』第五巻第三号、本誌一六三～一六八頁に全文掲載）にも現れている。まず、真に国家・社会のために身命をも捧げる志を抱き、実行する人物が「国士」であるとし「吾々の云ふ国士はたとへ貧乏であろうがその着けて居る衣服などは見すぼらしかろうが、そんな事はチットモ構はないのでありまして、心さへ美しくあれば可いのでありますから私は国士の方がゼントルマン（gentleman）よりも遙かに優って居ると存じます」と、つまり「ボロは着てても心は錦」といった日本古来の美徳を持った人物を育てんとしたのである。

こうした長瀬の思想は、第一次大戦後の日本を極めて

危機的状態にあると断じたところからきている。とくに、第一次大戦において戦勝国側にあったことからの慢心が国中に蔓延しているのではないかと危惧している。この点については、彼の論文や講演で数多く指摘されている。とくに、日本の国際連盟常任理事国入りに浮かれ、アメリカウイルソン大統領の「民族自決」発言の裏にある有色人種の差別化に対する反応があまりに鈍いことと、国政を論じる者の愛国心の欠如した不真面目なる態度につき深く憂慮している。

それでは如何にすべきなのか、日本はどうあるべきなのか、長瀬が最も重要視したのが真の愛国者たる青年の育成であった。『大民』第三巻第一一号には「起てよ我が青年」と題する一文が掲載されている。そこには長瀬の叫びにも似た言葉が綴られている。やや長文になるが、次に挙げてみる。

> 実に今日我が帝国に於ける最も大なる欠陥として認むべきものは、必らずしも富力でもなければ兵力でもない。即ち愛国心の欠如である。遺憾ながら我が国には真に愛国的政治家がない。真の愛国的教育家がない。真の愛国的思想家がない。真の愛国的学者がない。今や我が国家の国際上に於ける危機は時々刻々に近づきつゝあるではないか。
>
> 此の際此の秋吾人の最もその必要を感ずるは各方面に於て愛国的至誠を以て満てる人物の輩出せん事である。
>
> 要するに我が国民の時局に対する態度は甚だ真率を欠いて居る。否極めて不真面目である。斯かる愛国的至誠もなく真面目なる気概もなき国民にして果して克く来たるべき世界の大変局に処して禍なきを得るであらうか。吾人は之に対して深かく憂慮に堪へざるのである。

すなわち、「愛国的至誠を以て満てる人物の輩出」が急務であり、それなくして世界の大変局に立ち向かうことは困難であると論じている。

こうした思想は、国士舘高等部開館式での言葉にも如実に表れており、国士舘において真の愛国者たる「国士」の育成を目指したと言える。残念ながら、長瀬はその育成の道筋をつけた後、ほどなく世を去った。しかし、その精神は国士舘教育の熱き志として今日も息づいているのである。